

『金瓶梅』にみられる住まいの空間構成と 女性の領域に関する研究 結婚の儀礼について

藤原美樹* 松本静夫*

Study on the Room Arrangement and Women's Territory in the Novel " KIN PEI BAI "
On the Ceremony of Marriage

Miki FUJIWARA Shizuo MATSUMOTO

ABSTRACT

The Chinese classical literature "KIN PEI BAI" is known as one of the four most valuable books in China and it is said to be written in the middle of Banreki years in the Ming period. It is a long novel consisting of 100 stories. In this paper the order maintained by the wealthy feudal family in relation to the room arrangement is examined considering the relationship between the ceremony of marriage, one of the ritual initiations clear that, and women's territory. As a result it becomes women's territory in a house divided in accordance with hierarchy such as a wife, a mistress and a maid and family hierarchy was clearly reflected in the room arrangement. Physically it was divided by a fence, a wall and a door and was secluded from society. It was clear that Confucianism and moral discipline were strict with, especially, women. For a man it was one of the important conditions to get a lawful wife with well-balanced social status. Only one woman had the right to become the lawful wife and other women could be nothing but a mistress. A mistress was a kind of goods purchased by money. A marriage was a ceremony to take a wife from the outside to the inside. A bride, when she got married, went to a bridegroom's house on a closed palanquin and entered into a given territory. Women's room was closed and secluded from the outside world.

キーワード：室配置，封建家族，女性の地位，女性の領域，空間秩序

key words : room arrangement , feudal family, women's status , women's territory, spatial orde

1. はじめに

近年，中国の住宅に関する研究は増加しており，現代住宅の空間構成・住様式に関する研究，伝統住宅の空間構成・住様式に関する研究などの多くの既往研究がある。しかし，伝統住宅に関するものは，四合院住宅などの平面形態などの考察に偏重し，すまいと家族構造，女性の地位，女性の領域との関係などについて考察された研究は少ない^[1]。

本稿は，中国古典文学の『金瓶梅』^[2]を用い，その文脈

と挿画を素材として，明代の富豪封建家族の秩序維持の様相とすまいの空間構成との関係および通過儀礼のうち結婚の儀礼と女性の領域について解明することを試みる。

中国四大奇書のひとつとして知られる『金瓶梅』は，明の万暦中期(1567-1606年頃)に書かれたとされる，全100回の長編小説である。物語は，富豪商人の西门慶(xi men qing)を中心に，富豪一族の日常生活と市民生活が描かれており，明代の中国社会，政治，結婚制度，家族構造などを理解する上で貴重な歴史的文献との評価が高い作品である。

2. 明の封建家族のすまい

2.1 『金瓶梅』の時代背景

乃生男子 載寝之牀 載衣之裳 載弄之璋

其泣嗶嗶 朱芾斯皇 室家君主

乃生女子 載寝之地 載衣之楊 載弄之瓦

無非無儀 唯酒食是議 無父母詒罹 (『詩経』189番)

これは、女性の境遇が出生の時より、男性とは異なることを詠った詩である^[3]。女の子が生まれると、3日目に寝台の下に寝かされた。これは、低い身分と隷属性を示すためである。その後、親たちは、潔斎し出生を祖堂に報告する。

中国女性がもっとも隷属的であった時代は、モンゴルの支配下であった「元朝(1271-1368年)」,その反動で排外主義の傾向が強かった「明朝(1368-1644年)」,満州族の支配下にあった「清朝(1616-1912年)」の3つの王朝であった^[4]。

儒教の教えに「三従四徳」という女性に対する戒めがある^[5]。三従とは、在家従父、出嫁従夫、夫死従子(嫁に行くまでは父に従い、嫁に行ったら夫に従い、夫が死んだら子に従う)をいい、四徳とは、婦徳、婦容、婦言、婦工(女性らしい道徳、容姿、言葉使い、料理や裁縫の技術)を身につけることをいう。「婦徳」の中には、夫に対して一切寛容的であることも含まれている^[6]。よき妻は、妾を娶ることに反対したり、夫の愛情を独占してはいけない。

この物語は、山東省清河県を中心とする。ここは首都に近く、中央とのつながりの深い場所である。『金瓶梅』が生まれた時代は、商業が非常に繁栄した時代である。商人は裕福に暮らし、社会的地位も高まった。

明時代の最初の皇帝である太祖(1368-1398年)は、独裁政治をつくり、儒教を重んじ、勅令による貞節が奨励されていた。その反対に皇帝、官僚、富豪たちは、蓄妾や娼妓を思うままにしていた。

この時代の女性たちは纏足していたが、この習慣は、宋代(960-1279年)にはすでに確立されており、根強く続いていた。宋代以後、極端に小さく、先の尖った靴が女性の重要な持ち物のひとつになった。それは女性らしさの象徴でもあった^[7]。西門慶が初めて潘金蓮(pan jin lian)に出会ったときの西門慶の心中は、「金蓮はまるで、…半身がしびれてしまうほど美しくて…、細くて尖った足をしていた…(2回)。」

また、孟玉楼(meng yu lou)との出会いでは、「すんなり伸びたからだつき、化粧凝らした玉の肌…、裾にちらつく足先は、形めてたい金の蓮…(7回)。」と、纏足の魅力が表現されている。

「金蓮」とは、小足の代名詞である。男性を魅了するために、母親またはほかの婦人によって、3、4歳から纏足の施術がされる。纏足は美人の条件のひとつであり、男性をひきつけるための重要な魅力であった。

男性は、妾をもってよく、それを選ぶには、階層より、女性の美しさによって選択されていた。

下層階級の間では、男性が望むたびに女性の売り買いが行

われていた。

仲人婆が女性との仲をとりもつため、西門慶を称える時に女性に言った言葉、

「県庁前の西門の大旦那ってかた、いま提刑院で 掌刑千戸をしていらっしゃるんですが、お役人に金を貸したり、緞子屋、薬屋、呉服屋、糸屋など4、5軒の店を出しておられるほか…田畑は見渡す限りの広さ、米は倉の中で腐るほど。赤いのは金、白いのは銀、丸いのは真珠、光るのは宝石。身のまわりには大奥様、この方は清河左衛の呉千戸のお嬢様で、後添いなんです、そのほかにお部屋さまが5、6人、歌ったり舞ったりの腰元でお手のついたのが数十人を下りません。まったくのところ毎朝が寒食の節句、毎晩が元宵の節句というお暮らし…(69回)。」

このように、女性は商品であり、勢力を誇示するための道具とされていたことがわかる。

2.2 『金瓶梅』の家族とすまいの空間構成の概要

『金瓶梅』は、『水滸伝(1330年頃-1400年頃、作者:施耐庵)』の中のエピソードのひとつである。西門慶と潘金蓮の出会いから始まる。西門慶は、薬屋、質屋、緞子屋などの多くの店を営み、大富豪になる。また、お金によって官僚の地位も手に入れ、官商になる。人は家畜のように売買され、官位は金で取引され、刑罰も金次第である。

結婚制度は、宗族繁栄のため、一夫一妻多妾制度であり、男性中心の封建的な倫理道徳の時代であった。

物語の前半は、西門慶が次々と女性と富を手に入れる経緯、妻妾たちの葛藤、そしてとりまき、役人、親戚たちとの宴会や季節の行事の様子が書かれている。後半は、西門慶が潘金蓮によって、淫薬を飲まされ頓死した後、人も富も散り散りになっていく様子と因果報応の結末が書かれている。

西門慶には、正妻(継室、先妻は陳氏)の呉月娘(wu yue niang)のほか、第二夫人の李娇儿(li jiao er)、第三夫人の孟玉楼、第四夫人の孙雪娥(sun xue e)、第五夫人の潘金蓮、第六夫人の李瓶儿(li ping er)がおり、夫人たちは、屋敷内の与えられた自分の建物に居住する。

敷地の大部分を占める花園(hua yuan、庭園)は、築山、池、植栽そして堂(tang、接客を行う建物、花園内の主要な建物。聚景堂、燕游堂)、軒(xuan、堂より小規模な建物、翡翠軒、海棠軒)、亭(ting、柱のみで壁はなく、庭園の休息や、景色を鑑賞する建物。芙蓉亭、木香亭、卧云亭)、阁(ge、比較的立派な建物。藏春阁)、楼(lou、2階建以上の建物。玩花楼)などによって構成されている^[8]。

建物の配置は、外部に面する大門(da men)の中心を通る南北が対称軸として構成される(図-1)。左右対称の秩序は、建物の配置だけではなく、室内の家具の配置、装飾品、院子(yuan zi、中庭)の盆栽、草花にいたるまで統一されており、儒教思想の影響をみることができる。

来客は多く、食事、宴会の描写は非常に細かい。接客は、2つ目の門である儀門(yi men、儀門)を通り、大厅(da ting、客間、ホール)で主に行われる。大厅は対外的には、接客・

宴会などを行う公的空間であり、対内的には、祖先の空間であり、家族の年中行事などに使用され、敷地内では最も広い空間であり、住まいの中心的位置を占める。后仪门 (hou yi men) から奥は、夫人たちの建物であるため、后仪门は公私領域の区別の役目をもつ。

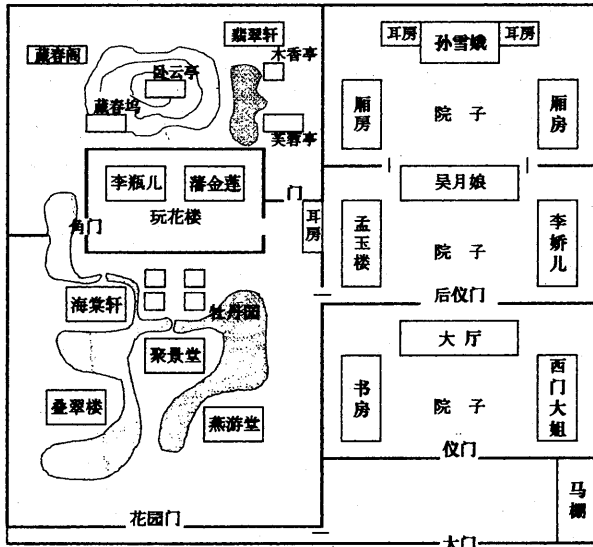


図-1 西门慶邸平面图 出典：[8, P.182]

2.3 すまいの中の女性

『金瓶梅』には、数多くの女性たちが登場する。この女性たちから、明時代の日常生活と女性の葛藤を知ることができる。作品名『金瓶梅』は、3人の女性、潘金莲、李瓶儿、春梅（潘金莲付き丫头, ya tou, 侍女のこと）の名から一字ずつとってつけられている。

女性たちは、大半を自分の部屋で過ごしていた。身の回りの世話や時には歩くことさえも侍女に世話をされる。

娯楽は、象棋 (xiang qi, 将棋のこと, 10, 44回ほか, 図-2)、双陆 (shuang liu, 双六のこと, 2回ほか)、骨牌 (gu pai, 竹札に獣骨あるいは象牙をはりつけ、表面にさいころの目が刻んである。マージャンに似た遊び, 18回ほか)、琵琶の演奏などであり、ときには庭で投壺 (tou hu, 壺に矢を投げ込み、勝った者が負けた者に酒を飲ませる遊び, 19, 27回ほか) など毎日過ごしている。

主人の定める秩序 (夫人のランク) を保ち、関心を引いておくために豪華な装飾品を身に付け、念入りに化粧をし、上等な料理を食べ、優雅で魅力的である必要があった。

日々の単調な生活の気晴らしに女部屋に自由に出入りのできた、仏教の尼僧や女易者が屋敷に呼ばれていた (図-3)。

男性は、儒教、道教、仏教に同等の関心をもっていたが、女性は仏教に関心を寄せていたことがわかる。仏教の普遍的な愛と慈悲の教えは、女性たちの精神的な欲求を満たし、子なきには子を授け賜る、大慈大悲の女性神の観世音菩薩の儀式も生活の気晴らしであった。また女性たちは尼僧に、身の相談も行う。



図-2 下象棋佳人消夜 (44回)

出典：[9, P.89]



図-3 薛姑子佛谈经 (74回)

出典：[9, P.14]

夫人たちには、李娇儿と孙雪娥を除き、侍女が2人ずつつけられている。使用人が多いと、食べ物から金品にいたるまで、紛失することが多いため、それぞれの部屋の侍女たちは、鍵をもち、部屋の管理を行う。財産の管理は各部屋それぞれに行われており、侍女もその部屋の家族の一員である。家長の財産管理は、正妻の担当であるが、呉月娘は病身のため、日々の金銭の出し入れは、第二夫人が受け持っていた。しかし、後になって日常の家計管理は輪番制になった (77回)。

夫人の地位を表すものとして、房 (fang) の語が使用されている。『金瓶梅詞典』によると、孙雪娥の人物説明には、「西门庆元配陈氏の陪房, 后为西门庆四房妾, 管灶」とある。陪房 (pei fang) とは、花嫁についてきた侍女の意である^[10]。つまり、西门慶の先妻 (陈氏, chen shi) の侍女であった孙雪娥は、厨房の仕事が優れている理由より、カマドを管理 (管灶, guan zao, 灶は竈の簡体字) する第四夫人になった。『現代中国語辞典 (光生館)』によると、「房」は、部屋或いは家屋という意と旧中国では、妻妾の量詞として用いられる。

四房妾とは、4番目の妾、4番目の部屋の夫人をさす。

これより、富裕層の大家族とは、個々の部屋の集合体であることがわかる。しかし、家族であっても、金で買われた妾や侍女には自分の財産はなく、外に売られる場合は、衣装ほか屋敷で手に入れた物は、すべてとりあげられる。

夫人たちが、居住している建物は、一明両暗形式 (図-4) で構成されている。卧室 (wo shi, 寝室) には、炕 (kang, 暖房床) がある。炕は、寝台としての役目と炕卓 (kang zhuo, 図-5) を使用する食事の場所としての役目がある。特別な年中行事などの日に家族で会食する以外は、侍女により運ばれてきた食事を自分の炕に腰掛けてする。また、炕は食事だけでなく、裁縫や他の夫人たちと世間話をする場所でもある。

大厅の北側を過ぎると、正妻の専用棟 (正房, 上房) である。東廂房には、第二夫人そしてその向かい側の西廂房には、第三夫人が住む。最北の建物には、第四夫人が居住する。この建物は後罩房である。後罩房とは、通常、女中や女兒の部

屋に使用される建物をいう。第五夫人、第六夫人の建物は、花園内にある楼房（2階建、玩花楼）である。このように、女性の地位と役割そして居住する屋敷内の領域区分の秩序が明確である。



図-4 一明兩暗形式の一例



図-5 炕卓(kang zhuo) 出典：[11, P. 131]

中国の代表的な伝統住宅である四合院住宅（図-6）は、正房がもっとも格式が高く、祭祀行事および重要な接客などに使用され、日常生活には使用されないのが一般的である。

西门慶邸の場合、大厅がその役目を果たしているため、正房は夫、正妻の専用棟として使用されている。

西门慶には、先妻の子である西门大姐 (xi men da jie) 以外に後継がおらず、第六夫人の李瓶儿が男子の官哥 (guan ge) を出産すると、西门慶は李瓶儿の部屋に入り浸りになり、嫉妬した潘金蓮は、官哥を殺してしまう (59回)。

このように、富裕大家族には、父と子、夫と妻のほかにも女性たちの厳しい上下の序列がある。女中は妾に従い、妾は正妻に従う。しかし、この関係は、男子を出産することによって、変わる可能性のある序列である。

ただし、正妻を2人娶ること、妾を正妻に昇格させることは、支那法では厳禁である [12]。

閉じられた家庭内では、妻妾、女中や使用人の口論が絶えず、家庭は日常紛争の場である。正妻は、重要な役割として祖先祭祀や家神の管理がある。使用人たちへ仕事の分担を行い、争い事を取りまとめるのも正妻の役目である。

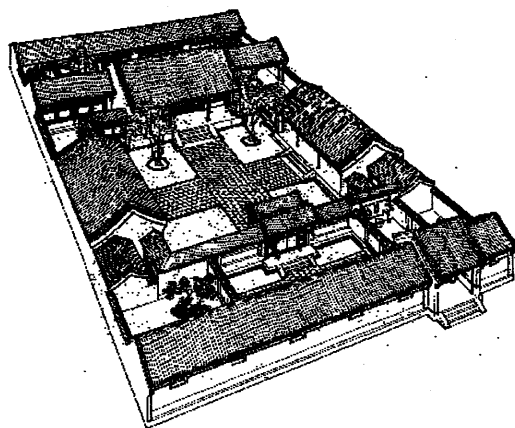


図-6 北京典型四合院住宅鳥瞰図

出典：[13, P. 319]

3. 結婚の儀礼と女性の領域

通過儀礼とは、誕生、命名、成人、婚礼、死などの人生の節目において行われる行事をいう。『金瓶梅』における住まいの空間構成と女性の領域を通過儀礼のうち、結婚、誕生、死の3つの儀礼に着目し、ここでは、結婚について考察する。

古来中国人は結婚を人生の大事と考えてきた。中国古代の結婚制度は一夫一婦多妾制で、男女ともに結婚の自由を持たず、必ず媒人 (mei ren, 媒酌人のこと) が仲立ちし、父母が取り定めた。「父母之命、媒酌之言」という、封建的請負婚である。

女性は嫁いで初めて、家族内あるいは社会的にも地位を獲得する。その時代の女性にとって結婚は、社会的意味での誕生である。

結婚には2種類ある。第一の結婚は、生涯連れ添う結婚で、この女性は正妻 (正室) と呼ばれ、特別な儀式によって迎えられる。第二の結婚は、妾との結婚である。正妻との間に男子がいない場合許されるものである。

正式な婚礼儀式は、婚姻の意思を示し、礼物を贈り、採扱の礼を行う「納采」、女性の姓氏を尋ねる「問名」、結婚の吉凶を占う「納吉」、婚約のしるしに両家が礼物を取り交わす「納徴」、結婚の日取りを決める「請期」、新郎が新婦を迎える「親迎」の六つの礼によって成立する。これを六礼といい、周時代にはすでに制度化されていた [14]。

物語の中で、西门慶は、孟玉楼 (8回)、潘金蓮 (9回)、李瓶儿 (19回) の3人を妾として迎える。

西门慶と孟玉楼の結婚の儀礼は、孟玉楼の屋敷内の大厅 (一明兩暗形式) の明間 (中央の公的な部屋) で行われた見合い (「納采」、 「問名」) から始まる (図-7, 8)。

場所は、倒座客位 (四合院建筑坐南朝北的待客房间 [15]) であり、重要な接客の場所である。室内の設えは、水月観音と善財童子の軸の前に翹头案 (qiao tou an, 蠟燭、線香

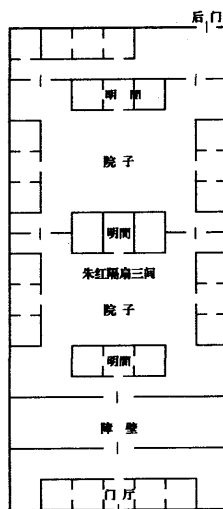


図-7 孟玉楼邸平面図

出典：[8, P. 166]



図-8 孟玉楼邸の客間

出典：[9, P. 14]

やお供えをする供物台), 平头案 (ping tou an, テーブル)の上には, 屏風がある. 接客用の椅子として, 四頭出官帽椅が設えられている. 古代中国のしきたりは, “左租右庙“, “男左女右“であり, 左側が格式があるとされている. 西门慶が正面, 孟玉楼と媒婆 (mei po) が右側に席が設えてある. 私的な居室, 寝室などにある椅子の種類は, 凳子 (deng zi, 小さい腰掛け, 図-13) や寝台を兼ねた羅漢床 (三方に背もたれのある寝台) などが使用される.

一家揃っての誕生会の様子^[6]をみると四頭出官帽椅に腰掛けているのは, 西门慶と正妻であり, 第2夫人以下の妾は, 凳子に座っている. 私的な行事の場合においても, 家庭内の地位により, 座る場所 (男左女右) だけでなく, 座具の種類も異なることがわかる. 凳子, 羅漢床, 或いは炕卓は, 「ケ」の場所としての設えであるのに対して, 儀礼的な椅子の四頭出官帽椅は「ハレ」の場所をつくる設えである.

見合いの席で, 西门慶から婚礼の日取りが決められる「請期」. このとき西门慶が持参した品 (聘礼, pin li, 結納品) は, 重箱に入れた綿のハンカチ 2枚, かんざし 1対, 金の指輪 6個である. 固めの品である「贈り物」をすることによって, 婚約が整う. 贈り物をするのも重要な儀式的過程のひとつである.

西门慶から孟玉楼へ結納「行禮の儀」(衣装, 髪飾りなど 20余りの荷物) がされるが, 荷物の後に, 正妻が轎でついて行く. 贈り物を受取ることで, 家族との結びつきが生まれる.

結婚の儀礼の中で, 儀礼的贈答が欠かせないものであることがわかる. そこには, 贈る, 受取る, 返礼するという過程がある. これは, 婚約の時点から儀礼的贈答関係で結ばれ, 姻戚の繋がりに重要な役割を果たす. 社会における行動規範でもある.

その後, 孟玉楼の嫁入り道具が運びだされる (図-9).

輿入れの日には, 一挺の花轿 (hua jiao, 花轎) と紅の紗を張った四対の堤燈が届けられる. これが「親迎」の儀式である. 二人の女中 (陪房) と小者を連れての嫁入りである.

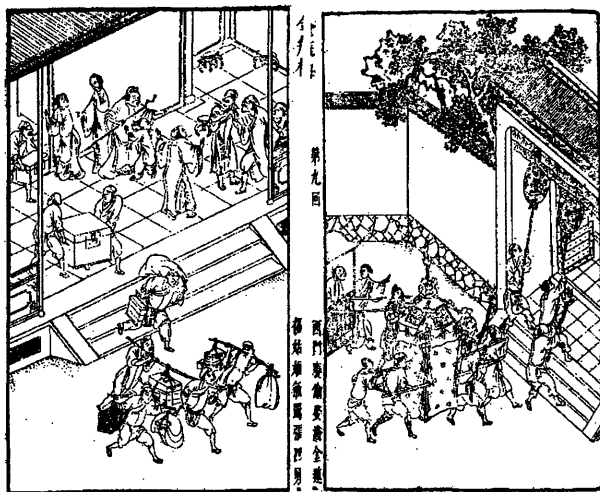


図-9 孟玉楼嫁入道具 (7回)

出典: [9, P. 15]



図-10 潘金蓮の花轿 (9回)

出典: [9, P. 18]

花轿は, 外から内部の様子が見えない閉ざされた装置である. 花轿による輿入れから後, 女性は宝瓶を抱えて, 与えられた洞房 (dong fang, 新婚部屋, 特に閨房をいう) へ入る. 宝瓶 (bao ping) は, 花嫁の轎に入れる瓶で, 中には五穀, 果物, 金銀, 宝石などが入っている. 洞房は, 塀によって囲われた, 更に内の場所である. 洞房で重要な位置を占める装置は, 架子床 (jia zi chuang, 寝台のこと, 図-14) である. これは, 羅漢床の上側に覆いのあるもので, 4本か6本の柱があり, 周囲は, 幔幕でふさがれ, 一つの閉じられた空間が形成される. 閨房 (gui fang) へ夫西门庆が訪れる時, 隔離された女性の領域が, 非日常的な場所となる.

第五夫人, 第六夫人として輿入れをする, 潘金蓮と李瓶儿の場合は, 正式な手順の儀礼はなく, 潘金蓮の儀式は, 嫁入り道具を運び, 翌日に一挺の大轎と四対の堤燈で輿入れ後 (9回, 図-10), 一家揃っての祝宴が庭園内の芙蓉亭で行われる. 屏風をたてまわし, 錦の幕をはりめぐらして酒席がつくられた (10回, 図-11). これは, 家族的結びつきの儀礼である. ハレの場所の設えとして, 屏風, 幕が用いられている. 西门慶と吳月娘は上座の床 (chuang) に座り, ほかの者は, 地面の席子 (xi zi, ござ, むしろ) に座る. 正妻と妾との序列は, 座具の種類と座る場所によって明確である.

李瓶儿との婚礼は, 西门慶の屋敷内の大厅 (図-12) で, 多数の客を招いて盛大な祝宴が行われた (20回). この祝いの席には, 他の夫人たちは, 招かれておらず, 広間の入口で覗いている. 李瓶儿の当日の衣装は,

「女は, 上には, 緋色の地に五色をあしらった緞の大袖の長上着, 下には, 緑色の地に, 金で枝と葉をあしらった百花模様の紗の裙といういでたち, 腰には碧玉の女帯を結び, 腕には金の袖どめをはめ, 胸には首飾りや環珞を垂らし, 腰には佩玉を帯び, 頭には真珠や翡翠の髪飾りを盛り上げ, 鬢にはかんざしをさし, 耳には金台の紫水晶の耳環, それから珠をくわえた鳳凰の形のかんざしを 2本鬘に挿しています。」とある. 当時の豪華な花嫁衣裳の装いである.

孟玉楼や潘金蓮の媒人である媒婆は, 正式の結婚を整える



図-11 庭園での祝宴 (10回)

出典: [9, P. 21]

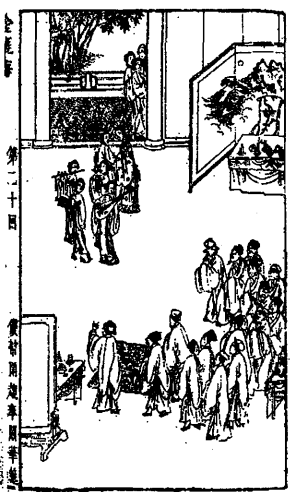


図-12 大厅での祝宴 (20回)

出典: [9, P. 40]

正式の媒人でないのは明らかであり、六婆(やり手婆、女媒人、女魔術師、泥棒女、やぶ医者、産婆の職業の女性)と呼ばれ、これらの女性は、社会からは非難される存在である^[17]。

3人の結婚の儀礼に共通することは、4対の提灯が灯され、花轿によって輿入れが行われることである。花轿という閉ざされた装置から、塀により閉ざされた「内」のさらに壁と扉によって閉ざされた「内」の領域に入る。以後、この領域に入ることのできる男性は、夫のみである。

李瓶児の花轿が到着し出迎えるのは、呉月娘である(19回)。これより、妾は、女主人である正妻に仕える立場であることがわかる。

結婚の儀礼は、紅事(hong shi)と呼ばれ、慶事の象徴として、紅色の布、絹で案(an, テーブル)や架子床は覆われる。

正妻は、婚礼によって主人と同じ身分に属するが、正式な婚礼儀式をしないで入ってきた女性は、偏房(pian fang)でしかない。



図-13 凳子(deng zi)
出典:[11, P. 87]

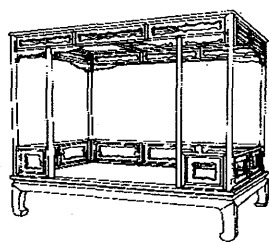


図-14 架子床(jia zi chuang)
出典:[11, P. 163]

4. まとめ

明時代の都市部富裕家族のすまいは、盗難防御、防寒避暑などのために塀により囲われている。専用の建物と使用人をもつ小さな家族のいくつもの集まりが1つの大家族を形成している。方位の序列は、北が最も格式が高く、東、西、南の順である。外に面した大門、それに続く儀門、后儀門などにより、空間の秩序が明確である。

客の主人に対しての親密度でどこまで招かれるか、進み入ることができるかが決まっている。建物の配置および室の配置は、家族の秩序であると同時に外部からの秩序でもあることがわかった。

また夫人、妾、女中などの序列により、屋敷内の領域が区分され、家族の序列がすまいの空間構成に明確に反映している。女中は妾に従い、妾は正妻に従う。そして全員が正妻に従う。日々、ささいな争いが絶えず、それをおさめるのも正妻の役目である。

明時代のすまい(家庭)の女性の領域は、塀と壁と扉で区分され、社会から隔離されたものであり、儒教思想、道徳の規律は特に女性に対して厳しいものであったことがわかる。

ただし、女性の地位が男性より低いという原則は、一つの

大邸宅内のすべての女性を指すのではなく、正妻は例外である。正式な手順によって嫁いできた正妻は重要な人物であり、家庭の中では他の夫人とはくらべものにならない大きな権力を持ち、家庭内の日常的な管理においては、正妻は夫とほとんど同等の権威をもつ。

結婚においては、封建的結婚家庭制度が長期間にわたり支配的な地位を占めてきた。結婚の強制、男尊女卑などが封建的家庭制度の基本的特徴である。このような封建的家父長制度の下では男女の婚姻に自由はなく、「父母の命令により婚姻を誓う」という強制結婚制度が通用し、結婚すると妻は死ぬまで尽くす事を求められ、男性による支配が中心である。

正妻を娶るには、身分などがつり合うことが重要であるが、正妻は、ただひとりであり、それ以外は妾である。妾は金銭により購入される物的存在である。

通過儀礼のうち「結婚」の儀礼は、外から内への儀礼である。夫人たちは、閉ざされた花轿で輿入れをし、与えられた領域にはいる。特別に着飾り、小者を連れて、祝祭場所などへ轿で外出するなど(15回ほか)の非日常的な行事を除き、日常的な女性の部屋は、閉ざされ、隔離された場所である。

参考文献

- [1] 藤原美樹, 松本静夫: 中国の家族構造とすまいの空間構成に関する研究 - 「金瓶梅」の家族と女性の領域 1-, 日本建築学会学術講演梗概集, pp. 155-156, (2003. 9).
- [2] 笑笑生: 「金瓶梅」, 小野忍, 千田九一訳, 平凡社, (1972).
- [3] 白川静: 「詩経」, pp. 126-127, 中公新書, (1970).
- [4] シャルル・メイエル: 「中国女性の歴史」, 辻由美訳, p. 415, 白水社, (1995).
- [5] 前掲 [4], p. 106.
- [6] 羅信耀: 「北京風俗大全」, 藤井省三ほか訳, p. 429, 平凡社, (1988).
- [7] 岡本隆三: 「纏足物語」, 東方書店, (1986).
- [8] 孟庆田: 「《红楼梦》和《金瓶梅》的建筑」, 青島出版社, pp. 159-199, (2001).
- [9] 瀧本弘之編: 「金瓶梅/红楼梦 挿画集」, 遊子館 (2003).
- [10] 白維国編: 「金瓶梅词典」, 中華書局, (1991).
- [11] 阮長江総編: 「中国歴代家具図録大全」, 江蘇美術出版社, (2001).
- [12] 牧野巽: 「支那家族研究」, p. 29, 生活社, (1944).
- [13] 王其鈞ほか: 「老房子 北京四合院」, 江蘇美術出版社, (1999).
- [14] 下見隆雄: 「礼記」, p. 230, 明德出版社, (1973).
- [15] 笑笑生, 白維国 卜鍵 校註: 「金瓶梅詞話校註」1, p. 209, 岳麓書社, (1995).
- [16] 前掲 [9], p. 146.
- [17] 前掲 [4], pp. 144-146.